

Principal Correspondence

クリエイティビティ系教育とトラディショナル系教育

数年前カリフォルニア州立大学名誉教授のバーバラ・ポーランド先生の案内でカリフォルニアの進んだ保育園、幼稚園、小学校を見学し、ディスカッションをする機会がありました。3つの施設とも普段では見られないものを公開していただき、さらに教員や保護者の意見を聞くチャンスがあり大変有意義でした。

訪問した幼稚園と小学校は、いわゆる「クリエイティビティ系」の施設で、創造性に力を入れており、幼稚園ではアトリエ(リリー幼稚園にはあります)、小学校では屋外の理科室?(リリーベールも真似しました)のような野外授業のできる施設もありました。こういう教育に共通しているのは**レッチョ・エミリア方式**(レッチョ・エミリア・アプローチといってイタリアの町で起こった子どもアート運動をさせています)を取り入れている点で、特にアートには格段の力をいれていました。きっとこういう学校から、第2のステイヴン・スピルバーグや、ステイブ・ジョブズなどが生まれていくのだろうなと思いました。

こういう年少のうちから型にはめず、発表型教育などでのびのびと発想を育てようという考え方の対極に、初等教育では基礎的な知識をしっかりと教え、その後に創造性を伸ばそうという考え方があります。これを「**トラディショナル系教育**」(訪問先の保護者がそう言っておられました)と言うそうです。

「クリエイティビティ系教育」の考え方を進めるために文科省は

1996年「生きる力」を教育の目標に掲げ、2000年から「**総合学習・ゆとり教育**」を取り入れました。結果、日本中で**深刻な学力低下**を招いたことは皆さんご存知の通りです。これは、基本的な知識や計算能力など**基礎学力をないがしろにして前頭葉をまず伸ばそうとした**ところに根本的な失敗があったと言われます。それでは「**トラディショナル系教育がやっぱり正しいの?**」と疑問に思うところですが、やはり**創造性の芽は大事**なのです。特に**体験活動が大事**です(感動と衝撃を感じることで**モチベーションと感性**が育ちます)。

子どもは「両方」が大事、バランスの問題と考えています。

クリエイティビティを司る脳が伸びるのは比較的遅く10代でも大丈夫。一方、基礎学力の第一歩は、生活習慣も含めて**ほぼ9歳までに伸ばす必要があります**。

このアメリカの「クリエイティビティ系」の幼稚園の保護者はこっそり私に言いました。

「このままの教育で有名学校には入学できません。ですから園ではのびのび遊んで創造性を育て、午後は塾に行かせて『**トラディショナル系教育**』をしている親はアメリカでも多いですよ。」

この答えに、私は「むむむ?」「ではどんな塾に行っておられるのですか?」と聞くと「**例えば, Kumon!**」という答えが返ってきました。あれれ?

子どもの心のやる気や、好奇心や感性の扉のノブは内側にしかついていないのです。外側からこじ開けることはできません。我々大人の役割は子ども自身で開けられるように、できるだけ多くの**気づきの場を提供すること**だと思います。



Principal Correspondence

脳には発達に期待されている環境があります

現代人の脳は数百年前の人間とほとんど変わらないと言われています。つまり現代人は石器時代の脳でアスファルトジャングルを生きているのです。

最近多くの大人のコミュニケーション能力が足りないという事が深刻になってきています。職場で、場の空気が読めない、場を外す、すべる、情が感じられない・・・という人が増えているのです。これは、どんな良い大学を出て大企業や官庁に勤めることができて3年以内に3割はやめてしまうという社会の問題となっています。

この深刻な適応の障害は、育つ過程（つまり脳のコミュニケーションを司る部分が育つときにそれを伸ばす経験が出来なかったこと）によると言われます。

コミュニケーション能力は、3歳ごろから9歳の臨界期ぐらいいまでに、その器ができてしまい、その後の成長は大変だともいわれます。

石器時代、大人の男は朝になると狩りに行き、女は山に木の実などを採取に行きました。残った子どもたちは集落で、年上の子が小さい子どもの面倒を見て小さい子は大きい子になつくという群れ遊びの生活を、人類史上延々と続けて大人になっていったと考えられます。その環境はまさにコミュニケーション能力を発達させる大事な場だったのです。

脳科学者の澤口俊之氏はこれを

「進化的に予測している環境=E. E. E. (Evolutionarily Expected Environments)」といい

現代社会では意識してその環境をつくらないといけないと言っています。



異年齢の群れ遊びはなくなりつつあります。現代では学校に行くと同年齢の子ども同士でしか遊びませんし、家での遊びも互いにゲーム機を持ち寄って黙々と対戦するようなものが目立ちます。幼稚園では縦割り保育と言って3歳から5歳をグループにして遊ばせるようなことをしますが、小学生になると学童保育ぐらしかその場を設定できません。

そう考えると学童保育は貴重な学びの場でもあります。

年長の子は下の子にリーダーシップをもって接して遊びを刺激し、下の子はフォロワーとしてリーダーの立ち居振る舞いを学んでいくのです。

リリーの学童はここを意識してプログラムを組んでいます。

